第三回星野立子新人賞

「太古の空」

吉田　林檎

この文を今渡さばや風光る
やうやくに仕事が楽し梅の花
囀やパズルのごとく位置を変へ
歩みても走つてみても搭朧
春雨や遠出せずとも町楽し
夜桜に魅入られてゐる宴かな
子が父を破りし一手春の雷
甘茶かけ御仏の顔変はりけり
吹き上ぐる春雪の窓十五階
泣き笑ひして寄席を出て春灯
春月に従ふ星の華やげり
枇杷落ちしところ雀の砂遊び
言ひさしてストロー回しソーダ水
夏服の袖折り返す左利き
切れ味の悪き刃も梅雨湿り
昼寄席のはねて一献初鰹
せつかちな夫の湯浴みの音も夏
勝鬨の余韻のままに麦茶干す
ナイター沸く外つ国よりの代打者に
有楽町歓楽街の月涼し
遠雷や男半裸の野外劇
落蝉の一日かけて死にゆけり
幾百の膝を折り曲げ神輿揺る
台風の去りて太古の空戻る
名月やそろそろ狐に戻りたし
千年のうちの一日の秋思かな
秋の蝶順風のほかなきごとく
金木犀今日は自分を甘やかし
チアガール出番待ちをり天高し
金風の塵芥まで光らしむ
そぞろ寒我も幽霊画も女
曼珠沙華紅の闇なせりける
小鳥来る倉庫をカフェに建て替へて
猫じやらし風に飼ひならされてをり
帰れとも行かないでとも虫すだく
欄干に誰の集めしくぬぎの実
冬紅葉忘るるために来しものを
マスクしてますます口をきかぬ子に
人通りなき場も警備冬の菊
日向ぼこ言葉交はせば生き返り
座してすぐ取り出す手帳町師走
着ぶくれて肝心なもの買ひ忘れ
鷹匠の歩めば鷹のすがりつき
山手線時に轟きさくら鍋
夜廻やわが町にまだ知らぬ路地
納め句座叱られしこと大切に
確かなる靴音仕事始かな
入力の手をとめ御慶申しけり
寒紅や言葉選びを違ふまじ
まだ出来る軌道修正春を待つ